



会報



DISTRICT 253
CLUB BULLETIN

創立 S34.6.9 承認 S34.6.27

鶴岡ロータリー

THE ROTARY CLUB
OF TSURUOKA

田 植

例会場 鶴岡市馬場町 物産館3階ホール
例会日 毎週火曜日 12:30 - 13:30
事務所 鶴岡市馬場町 商工会議所内
電話 0235 (2) 5775

会 長 上 野 三 郎
幹 事 佐 藤 順 治

全人類を 結びつけるために 奉仕せよ

SERVE TO UNITE MANKIND

W. ジャック・デービス

1977~78 国際ロータリー会長

第 956 号

1978. 5. 9 (火) (晴)

No.43

本日のプログラム

1. 点 鐘
2. ロータリーソング (それでこそロータリー)
3. ビジター・ゲスト紹介
4. 会 長 報 告
5. 幹 事 報 告
6. 次年度ターゲットについて 次期会長 三井 健君
7. お願い (R.A.C. 会員増強について) R.A.C. 社会奉仕委員長 五十嵐 武君
8. 交換学生 清野千栄子さんについて 高橋良士君
9. ゲスト・スピーチ「江戸時代の飢饉食」について 山形県文化財保護指導委員 若松多八郎氏
10. 出 席 報 告
11. 点 鐘

■ ビジター紹介

菅原幸雄君（プレハブ建設） 斎藤健治君（農業） } 鶴岡西R.C
林権之助君（電気器具販売） 斎藤吉雄君（管材販売） }

■ 会長報告

1. 去る5月7日（日）山形西R.Cから招待をうけて、創立20周年記念式典に参列して参りました。会場はホテル・オーヌマで、来賓には山形市長、山形商工会議所会頭、加藤ガバナー、県内のバストガバナー、近隣クラブのメンバー、それに姉妹クラブである高知南R.Cから会長・幹事はじめ7名、又友好クラブの酒田東R.C、遊佐R.Cからも24名が出席して、参列者百数十名で賑々しく、且つ厳粛な式典でした。

記念事業として、市の中央公園内に175坪の円型の和風庭園を造成して、市に寄贈されたとのことで昨年3月に記念事業委員会を発足して検討を重ねてきた結果であるとのことでした。

2. 台中港区R.Cからさきの統盟を記念して当クラブに贈られた記念品（木製の馬）が到着いたしました。
3. 次回例会（5月16日）は東京大会に出席のため、会長が不在となりますので、例会の司会を三井健副会長にお願いいたしました。

■ 幹事報告

1. 例会場所、時間変更

- (1) 立川R.C

来る5月11日は職場訪問の為、次の通り変更

と き 5月11日（木） P.M 12:30

ところ 狩川小学校旧校舎内

2. 会報到着

- (1) 遊佐R.C (2) 酒田東R.C (3) 酒田R.C

■ 次年度ターゲットについて

次期会長 三井 健 君

レヌーフ R.I 新会長がターゲットとして

REACH OUT（手をさしのべよう。）を展開させたい旨、次期ガバナー黒沢茂氏より発表がありました。

「江戸時代の飢饉食」について（藁餅、松皮餅、土がゆ）

山形県文化財保護指導委員 若松 多八郎氏

江戸時代は小氷期と言われる寒冷な時代であり、再々に亘って大飢饉におそわれている。現代もまた江戸時代と同じように小氷期に入ったと言われ、いつ地球のどこかで大不作に見舞われるかも知れない危ない時期なのである。それにかえて加えて世界人口は今後20年間に2倍に増えると言われている。こうして見ると世界的食糧危機がやがてやって来るという事は識者のひとしく指摘している所なのである。

こうした時に、江戸時代の非常時に人々はどんな工夫をして危機を乗り越えて来たものであるかを知る事は、あながち無意味な事ではないと思われる。ましてや今日のような経済危機に際しては、発想の転換を求められている時期であるとも言える。こうした意味で先人たちのすばらしい発想には教えられるものが多い。

江戸時代の飢饉の時に、藁餅、松皮餅を食べたという伝承は、今もって庄内の各地に残されている。

藁餅というのは、実らなかった生藁を水にさらして切り、天日にかけ乾かし、臼でひいて粉にして、1～2割のくず米などを入れてふかしてついて餅にするものである。藁を食べたと言え、これは牛や馬である。人々はどのように藁に目をつけたものであろうか。

これは、不作の時の稲の葉には、本来実になるはずの栄養が多少なりとも残っているに違いないと考えた所にある。だから不作の年の藁ほどうまいと記録されている。言われて見ればもっともな着想である。

松皮餅は、松の内皮をふかして、ついて餅にしたものである。これは大阪近くの僧が山中で修業中に工夫したものであると伝えられている。

昨年、NHK東京放送局が、藁餅と共に松皮餅も試作し、全国に放映されたが、それを試食する機会に恵まれた。なかなかおいしいものであった。庄内地方でも盛んに食べたという記録が残されているし、伝承も今もってある。松の皮を一僧が利用したのは、おそらく松の皮の厚い所に着目したものにちがいない。

江戸時代の飢饉食の中で最大の傑作は土がゆである。土を水にとかして石や砂を沈め、上水を別の桶に入れる。これを日に3度、両3日くりかえした泥水を、かゆのようにして煮て食べる。ただこれだけである。土を食べると言え、まさにミミズである。こんなものが栄養になるだろうかとどなたも思われるに違いない。ところが、これを工夫した遊佐東庵という医師は、自分の弟子たちにほかのものを食べさせずに土がゆだけを食べさせて見た結果、17日ないし30日飢を知らず、身体ますます健やかかなりと報告している。まさに驚きである。

東庵の着眼は、土には万物を育てる力がある。だから土には栄養があるはずであると考えたと記されている。まことに胸をつかれたような、すばらしい発想である。

こうした前人未踏の着想をもってすれば、食料危機、経済危機も何のそのという気すらするのである。

庄内の人々は飢饉の時に、藁餅、松皮餅などだけを食べたものではなく、江戸時代末の天保4年の大飢饉には更にいろいろなものを食用としている。歌人上野甚作の所蔵書の中に見聞録という一書がある。これは天保の飢饉の時に庄内の人々が食べたものを記録した寒河江良貞という人の天保5年の書である。これを見ると115種に及ぶ食用野草が記されている。今、私たちが山菜と称して食用にしているものは40種前後にすぎない。

この本の中で教えられるものは、寒河江良貞の人生観とでも言うべき最後の結びの言葉である。その大要は、自分は若い時より、なるだけ国産を食し、国産を着、国産を用いる流儀であり、保存食を尊重して来たというのである。

今、この流儀をつらぬくならば、輸入食糧ゼロの日になっても、あわてる事にはならないにちがいない。また、国産を家産と言いかえて見るなら、できるだけ家にあるものを用いる考え方が生れてくる。

米沢の名君上杉鷹山公が、垣根にはウコギ(食用)を植えよ、畑の境には茶を植えよ、池には食用の鯉を飼えと奨励した方策は、まさに寒河江良貞の精神と一致するものであり、今もって米沢の鯉料理が名をなしている基をなしているのも、こうした国産主義から発しているのである。

現在の豊かな生活の中では、飢饉食など何の意味もないように思えるが、非常時を生きぬいて来た私たちの祖先の智慧には頭の下る思いがするものである。

■ 出席報告

本日の出席	会員数	69名	欠席者	阿部(公)君、阿部(襄)君、早坂(徳)君、半田君、五十嵐(三)君、黒谷君、高橋(耕)君、三浦君、中江君、中野(清)君、斎藤(栄)君、板垣(広)君、佐藤(友)君、笹原君、高橋(正)君、谷口君、金沢君
	出席数	52名		
	出席率	75.36%		

前回の出席	前回出席率	73.91%	メモアップ	阿部(襄)君—余目R.C 三井(健)君、佐藤(友)君、山口君—立川R.C 風間君—山形R.C 笹原君—仙台R.C 皆川君、半田君、玉城君、黒谷君、中村君、佐藤(衛)君、丹下君、高橋(良)君、諸橋君—鶴岡西R.C
	修正出席数	66名		
	確定出席率	95.65%		